星が流れ落ちる場所

綾瀬トモ

第１章　河の流れのように

　流河《りゅうが》は、自分の名前を大自然を使って表すかのごとく、河を流れていた。
　しかも、海に向かって河の下るのではなく、上流に向かって上っているのだから、人間業ではいない。
　本人は気絶したまま、身体を浮かせ、着の身着のまま流されている。
　スバルは、河原から竿をつきだして糸を垂らし、今晩のおかずを獲ようと試みていた。
「う～ん、釣れない……」
　一応、針が付いてなかったり、餌が付いていないという初歩的なミスは犯してはいないが、それ以前に河を凝視しても魚の影すら確認できないのが問題なのだろう。
　これでは、今晩のおかずを皆に振る舞うことも出来ない。
　どうしたものか？
「お、大物が来たぞ！」
　そういって、スバルは針を一度自分の手元へと戻すと、竿を振りかざし、いや振り回して、獲物へ針をかけようとする。
　河を流れてきた流河に向かって――。
「いでぇ」
　流河は、自分の口元に激痛を感じ、その目を覚ます。痛みと共に、身体全体が冷たい事に気がつく。
　首を横に動かすと、何故か河に浮かんでいる。が、今はそれよりも口の中が痛い。
　流河が口元の痛みの元を取ろうとすると、手に糸が絡まってきた。
　――糸？
　その糸を試しにたぐり寄せてみる。
「うおっとと、抵抗してきた」
　河原のほうから声がしてきた。
　ということは、これは釣り糸で……、俺を釣る気でいるのか？
　冗談じゃない。人間を釣る馬鹿が何処の世界にいる。そんなのはネットの中だけで十分だ。
　流河は口に引っかかった針を取ろうと、さらに糸を引っ張る。そうしないと、針が食い込んで抜けないからだ。
「わわわ、待って待って！　このままだと落ちる～」
　落ちると言われても、こちらも痛いのだ。そう簡単に引き下がれるか。
　――しかし、先ほどから随分と幼く可愛らしい声が耳に届いているな。いったい声の主はどんな奴なのだ。
　流河は河原に向かって顔を向けると、随分と小さな女の子が竿を握っている。どうみても、小学生ぐらいにしか見えない。
　あんな子供が引っ張っているのだ、そりゃ、大人の流河が引っ張れば、力負けをして落ちるに

決まっている。
　かといって、引っ張らなければ、口元の針が取れなくて困る。――向こう岸へ泳ぐか？
　流河は自分の身体を岸へ向かわせるべく、手で水をかこうと水中へ手を入れ込む。すると、がこっと岩に指を当ててしまった。
　思ったより水位が低いらしい。この浅さなら、立ち上がって向こう岸へと歩いていけば問題ないのではないだろうかと思い、流河はその場に立ち上がってみる。
　すると、先ほどまで引っ張っていた糸が急に弛《たる》み、力が抜けたため、踏ん張っていた女の子の身体がふわっと宙に浮く。そのまま、後ろへと尻餅をついてくれれば問題なかったのだが、何故か前に落ちかけている。
　どういう力のかけ方をしていたのかわからないが、流河があぶないと思った瞬間には、すでに女の子は河の中へと落ちていた。
　――ザッブン
　水面に女の子が落ちた衝撃で、大きな音が辺りに鳴り響き、水面が波打って揺れている。
「おい、大丈夫か？」
　流河は口元の針を抜き取り、落ちた女の子の元へと駆け寄る。
「あいたたた、膝《ひざ》を打った」
　スバルは目に涙を浮かべて、膝をさすっている。少しこすれて、血がにじんでいるが、それほど大事《おおごと》にはなっていないようだ。
「悪いな。まさか前に落ちるとは思ってなかったから」
　流河は素直に自分の非を謝る。
「ん、大丈夫。心配ないよ」
　スバルもまた自分の無事を獲物に言う。
「それで、きみの名前は？　ここで何をしてたんだ？」
　流河は至極当然の質問をする。記憶が確かなら、今日は平日で、太陽の位置からして、まだ学校があっている時間だろう。
　ただし、自分が何日間この河に放流されていたかを勘定に入れなかった場合だ。もしかすると、随分と日にちが経って、今日は休日かも知れない。
「名前はスバル。歳はえっと八歳だっけ……。ああ、もちろん女の子だよ。何をしてたかって言うと、今日の晩ご飯のおかずを釣ってた」
「スバルか。しかし、河で晩飯を釣るって、フナかコイぐらいしか泳いでないだろう？　それに川魚は臭いから臭みを取らないと食べられないぞ」
「んっと、詳しくはわかんないけど……。ここにはアユとかニジマスも放流されてるから、そういうのもたまに釣れるし」
「ちょっと待て！　なんでそんな魚が泳いでるんだ？　そういうのは綺麗な水の川にしかいないだろう」
「だってここ、水が綺麗で有名な曾河《ひいがわ》ってところだもん。居て当たり前だよ」
「……？　曾河だって？　いったい何処だよここ」
「だから曾河。龍生市《りゅうせいし》にある曾河」

流河は困惑した。スバルの言うことが本当なら、自分は全く知らない都市の河を流れていたことになる。
記憶を辿《たど》っていくと、流河は坂下市《さかしたし》で開かれた、ＳＮＳという、いま流行《はやり》のコミュニケーションサイトにあったとあるコミュニティのＯＦＦ会に参加したはずだ。
参加したまではよかったのだが、この中に変な奴らが参加していて、そいつらが高額な商品（実際には安物であろう）を売りつけようとし始めたので、その行動に怒った別のメンバーがそいつらを殴って暴動になって……。それで、俺はそのゴタゴタに巻き込まれて、橋の上から落ちたんだっけ。
「あぁ……、店から逃げていった奴を追いかけて橋まで行くんじゃなかった」
妙な正義感は時として自分を変な境遇へと追いやってしまうらしい。
「ねぇ、スバルの獲物さん」
「俺は獲物なんて名前じゃない。流河って名前がある」
「なんでもいい。獲物の名前を聞いたところで、今日の晩ご飯には私のお腹の中だし」
「食うなよ！　同じ人種の人間を食べるなんて、そんな人間何処に居るんだよ！」
「……なんだやっぱり人間だったのか。てっきり人間の形をして喋る新種の擬態魚《ぎたいぎょ》かと思った」
「いねぇ、絶対いねぇよ。魚類ってのは、エラ呼吸するんだ。エラ呼吸。俺の顔にはエラなんていつていないだろう？」
「そうなの？　それは知らなかった。スバルはひとつ賢くなったぞ」
スバルは腕を組んでうんうん頷いている。自分の中でなにか満足げになっているのだろう。
――それにしても、寒い。なぜだ？
坂下市にいたときは、夏だった。蒸し暑いぐらいの夏だったはずだ。それがこの龍生市の曾河という場所は、極寒の冬のように寒い。
流河自身が息を吐くと、周りの空気が白くなるぐらいだ。しかも、いまは河の中だ。余計に寒い。
「おい、スバル。龍生市はいま冬なのか？」
「そんなの当たり前だろう。何を言っているのだ、流河は？」
ちゃんと名前を覚えていたのか。
「う～ん、何がどうなっているのか。とにかく、ここ寒いからさっさと岸へ上がろう」
「しかし、まだ一匹も釣れていない」
「とりあえず、服を乾かして、それからまた釣ればいいだろう」
流河は、スバルを抱きかかえると岸まで運んでやった。
服を乾かそうと、その辺に落ちているゴミや小枝を拾ってかき集めると、火をつけようとポケットの財布に入れていたマッチを取り出す。橋から落ちる前に店で貰ったマッチだ。
財布の小銭入れの部分に入れていたおかげで、湿気《しけ》っていないようだ。
ゴミが混じっているせいで、少々燃やしたときのニオイが臭いが、そこは我慢しよう。いまは

暖が欲しい。
「ふう、やっと落ち着ける」
「暖かい」
　スバルも火に当たりながら、手を擦り合わせる。
「そりゃそうだろう。しかし、この真冬にＴシャツ一枚とは、お前の親は何を考えて……ぶっ！」
　スバルが座っている姿をよく見てみると、下を穿いていない。下着を着けないで下半身を露出させていやがる。
「ちょ。お前、なんでパンツ穿いてないんだよ」
「パンツ……？　ああ、なんだか窮屈だから穿いていない」
「いやいや、そういう問題じゃ。お前、女の子だろ。そんな大事な場所を人様に晒していてはいかん」
「そうなの？　とくにみんなから注意されたことはなかったけど」
「みんなってどんな奴らだよ。お前、親から虐待《ぎゃくたい》とか受けてるわけじゃないよな？」
「スバルの産みの親は知らない。ここに捨てられていたから。育ててくれたのは、ここに住んでいるみんな」
「……そうか、捨て子か。酷い親もいたもんだな」
「でも、覚えていないから悲しくはない」
「しかし、ここに住んでるって？　施設らしきものは無さそうにみえるけど」
「だから、ここ。この河に住んでいるの。いまは、建ってないけど、夜になるとテントが岸にびっしり張られるの」
「お前、ホームレスなのか」
「うん。スバルはここを住処にしてる人達に育てられたんだよ」
「じゃあ、学校へも行ってないのか」
「勉強は、みどじぃが教えてくれる。昔、小学校の先生だったんだって」
「そんな人までホームレスの中にはいるのか」
「別に珍しい事じゃないみたいだよ。いろんなことをしてた人達がここには住んでるから」
「なるほどな」
　世間というのは、なかなか大変なものらしい。
　流河は、スバルの話を聞きながら、火の勢いが弱くならないように、小枝を焚き火の中へと入れ込んだ。
「で、ほかのホームレス達はいま何をしてるんだ？」
「仕事をしに行ったり、べつの場所でごろごろ昼寝でもしてるかもね。一ヶ所に溜まっていると、行政の人とか警察の人が五月蠅いんだって」
「そりゃ、そうだろうな。ホームレスって社会問題化してきてるぐらいだし」
「スバルは街に出て仕事できないから、みどじぃが勉強を教えてくれないときは、魚を釣ったり、食料になる雑草を探しに出かけたり、そんなことをしてる」

　さてどうしたものかと流河は考えた。誰か大人に話を聞いてみないことには、ここの正確な所在地も今日が何月何日の何曜日なのかもわからないだろう。
　服が乾いたら、とりあえずスバルから街の方向を聞いて、そこで情報収集してみるか。
　流河はスバルとの会話を楽しみつつ、自分の服が乾くのをじっと待った。

第２章　ここは何処？

　服が乾く頃になると、辺りはすっかり暗くなり、日も沈んでいた。予想以上に服が乾くのに時間がかかってしまった。
　こうなれば、ここに戻って来るというホームレスの人間に聞いた方が早い気がしてきた。
「あ、そろそろ帰ってきたみたい」
　河川敷のところに、自転車いっぱいに荷物を積んだ老若男女が集まってきていた。
「なんで若い奴らまでいるんだ？」
「うーんっと、ニートっていうのかな？　よく知らないけど、なんか家から追い出されたって言ってた」
　――それはおかしいだろ。俺の住んでいたところでもニートは社会現象になりかけていたけど、家を追い出されて暮らすニートだって？　それはニートと呼んでいいのだろうか？　ある意味、たくましく社会を生きていると思うぞ。
「スバル。元気に遊んでいたかのう？」
　一人の老人が話しかけてくる。
「みどじぃお帰りなさい」
　どうやらこの人が、スバルの話にも出てきたみどじぃらしい。
「初めましてこんばんは」
　流河はみどじぃに対して会釈する。
「おや、新しい仲間が増えたのか？」
「ううん、違う。流河はその河を流れてたの」
「それはまた、面白いことこの上ないのう」
　ほほほと口元をゆるませて笑うみどじぃ。
「それで流河とやら。なにゆえ、この河を流れてきたのじゃ」
「いや、それが……。俺はたしかに坂上市のとある橋から落ちたはずなんだ。それなのに、気がついたら龍生市の曾河を流れていたんだ」
「坂上市とな？　それはまた懐かしい名前じゃのう。　坂上市とは龍生市が出来る前の名前じゃのう。坂上市と龍生町が合併して、龍生市になったのは、もう十年ほど前かのう」
「十年前だって？　その話は本当なのか？　みどじぃ」
「嘘をついてどうする？　地方自治体は合併が進んでの。本来なら、合併後は坂上市の名前が残るはずじゃったのだが、そもそも龍生という地名のほうが古くての。偉い学者が、古くからある地名を無くすのはよくないと言って、結局は龍生市という名前になったんじゃ」
「だけど、俺は坂上市に住んでいたけど、曾河なんて河は聞いたこと無い」
「そりゃそうじゃろう。元々曾河は、龍生町側にあった河じゃからな。御主、そんなことも知らないのか？」
「みどじぃ、悪いけど、いまは西暦何年だ？」

「西暦二〇二五年の十二月じゃ」
「ちょっと待ってくれ。頭がこんがらがりそうだ。俺のいた坂上市は西暦二〇一〇年の八月だった。ということは、ここは十五年も先の未来ということになるじゃないか」
「ふむ。御主の頭がおかしくないならば、それであっておるだろうな」
「うがぁ。俺はいま未来に来ているって事か。それじゃあ、どうやって帰ればいいんだ……」
　いきなり突きつけられた現実に、意気消沈する流河。
「別によいではないか。若いままで未来に来られるなどそうそう無いぞ。儂の若い頃は、よく遠い未来に憧れたものじゃ」
「よくない。十五年なんて中途半端すぎるだろ。行方不明者として扱われていても、十五年も経ってたらまず死亡扱いだぞ」
「そう儂を怒鳴られても困る。スバルも怯えておるぞ」
　そう言われてよく辺りを見てみると、スバルはみどじぃの後ろに回り込み、びくびくした目で流河のことを見つめていた。
「すまん。スバルを驚かせてしまったみたいだな」
「流河は怒ってはいないのか？」
「いや、混乱と興奮で、声が大きくなっていただけだ」
「……そうか。よかった」
　スバルはホッと胸をなで下ろした。
「流河とやら。ひとまず夕食にしよう。皆も腹を空かせておるのでな」
　みどじぃは、一団の中へととけ込んでいくと「さあ、夕食の準備じゃ」と皆に声をかけ、そうして程なく夕食会が始まった。
　今日のおかずはクリームシチューらしい。鍋の中で煮込んだシチューが美味しそうに湯気を上げている。
「俺も食べていいのか？」
「別に構わんよ。スバルと遊んで貰っていた御礼じゃ。それにさっき財布の中身を見せて貰ったが、御前さんが持ってるのは旧札じゃ。使えん事はないが、そのまま店で使うと怪訝な顔をされるかもしれんぞ」
「また、お札のデザインが変わったのか？」
「ある時期、精巧な偽造札束が見つかっての。あまりに出来が良かったものじゃから、急遽、お札のデザインの更新時期を早めたんじゃ」
「銀行に行って変えて貰うか……」
「そうしてもよいが止めておけ。御前さんが過去に戻るとき、お札を替えて貰っていたら、過去では使えんのだぞ」
「そっか、それはまずい」
「どうしてもというなら、必要最低限にしておくんじゃな。食事に関しては、毎日ここで夕食を取るがいい。どうやら、スバルも御前さんのこと気に入ったみたいじゃから」
　スバルは先ほどから流河の隣で、シチューをふうふうと冷ましては、口の中いっぱいに頬張り、また冷ましては頬張るといった動作を延々と繰り返している。

「口の周りが汚れているぞ」
　流河がハンカチでスバルの口の周りを拭いてやる。
「んぅん、ありがとう」
　スバルは一言礼を言うとまた食べ始める。また、口の周りが汚れ始めたが、もう食事が終わってから拭いてやることにしよう。これではきりがない。
　食事が終わると、食器を河で洗い始める。河を汚染しないのかと聞くと、魚たちのよいエサになるから問題ないらしい。本当か？
「まぁ、洗剤使って洗ってる訳じゃないし、大丈夫かな」
「さぼってないで、ゴシゴシ手で洗え！　流河」
　なぜかスバルに一喝される。
　食器を洗い終わると、今度は寝床のテントを張る作業を手伝わされた。
　スバルはみどじぃと寝るらしい。みどじぃの持っているテントは三人用で、流河が一緒に寝ても十分なスペースがあった。
　というわけで、スバルの要望もあって流河もみどじぃのテントで一緒に寝ることとなり、頑張って立てたテントの中で、いまは薄い毛布を被って寝転がっている。
「なぁ、みどじぃ」
「なんじゃ？」
「なんでみんなここに集まって夕食を食べたり、寝たりしてるんだ？」
「スバルが居るからじゃよ。皆寂しいんじゃ」
「人恋しくて寂しいから集まるのはわかるよ。でも、スバルをここに置いておく必要はないだろう？」
「スバルはここ以外へは外に出たことが殆ど無い。スバルを街に連れて行くことは出来ん」
「なんでさ？」
「考えても見ろ。スバルを連れて町中を歩いておったら、確実に警察官から職務質問を受けるじゃろ。儂らはホームレスじゃし、スバルは捨て子じゃ。それがわかれば、スバルは施設に連れて行かれてしまう」
「施設に入れた方がスバルにとっても良いことなんじゃないのか？」
「儂らも昔はそう思っとった。しかし、スバルがそれを拒んだからの。ならば、儂らはスバルを自分たちなりに守ってやらなきゃならん」
「それでもスバルが大きくなったときに困るだろう」
「それに儂らは皆、いまの社会に適合できなかった者達じゃ。スバルもまた、社会に捨てられた存在のような者だ。そんな者が再び社会の中に入っていって生きられると思うか？」
「それはやってみなくちゃわからないだろ？」
「儂はかつて教師をしていたからわかるのじゃが、社会に適合できなかった子供は大抵心が病んでいってしまった。だから儂はスバルに、自給自足で生活する方法を教えた。成長したとき一人でも生きられるようにな」
　流河はみどじぃの言った言葉を噛み締めながら、腕を頭の後ろで組んで枕代わりにする。

　自分がもし社会に適応できなくなったとき、いやスバルのように社会とは元から関わりが薄かった人間が社会の中に入って生きたとき、果たしてまともな精神を保てるものなのだろうか？
　たとえ社会の中に入れたとしても、それは人として幸せなのだろうか？
　たぶんここにいる人達は、いまの社会とは違う別の……自分たちだけの社会を確立しているのかも知れない。
　人は一人では生きていけないが、そのために自分の精神が苦痛に歪められる社会でも生きてはいけない。人は人がいて、そしてその人達が心地よいと思える社会でしか、本当の自分というものをさらけ出し、自己を確立するのは難しいのかもしれないと随分と哲学的なことを考え始めた自分を心の中で嘲笑い、流河は深い眠りについた。

　一夜明け、早朝に目を覚ました流河がテントの外へ出ると、殆どのテントがすでに片付けられており、河原は雑草だけが生い茂るだだっ広い平野へと変わっていた。
「起きたか、流河よ」
　みどじぃが流河の朝食を片手に持って話しかけてくる。
「もう、他のみんなは出ちまったのか？」
「集団で長居をしていると、すぐに役所に電話がかかるのでな。ここの者は皆、朝が早い」
「儂もそろそろ出なきゃいかん。テントを片付けるのを手伝え」
「スバルはどうするんだ？」
「どういう意味じゃ？」
「連れて行かないのか？」
「無理じゃといったであろう。スバルはずっとここに居る。心配せんでも何処にも行きはしない」
「でも、警察とかが来て補導するかもしれないだろ？」
「それも大丈夫じゃ。スバルを捕まえることなどできん。いや、姿さえ見つけることが出来ないかもしれないじゃろう」
「あいつはそんなに隠れるのが上手いって事か？」
「ほほほ、そんなとこじゃな。そうでなければ、とうの昔にスバルはここから居なくなっとるわい」
「なるほどな」
「流河！　スバル一人にテントを片付けさせるつもりか？　居候ならしっかり働け！」
　流河はみどじぃから貰った賞味期限切れのおにぎりを頬張ると、みどじぃとスバルと一緒にテントを片付け始めた。

「スバルはどうする？　今日もつれない魚を釣りに行くのか？」
「そんなことはない。釣ろうと思えば釣れる。現に昨日だって、流河を釣り上げたじゃないか」
「まあいい。お前の好きにしろ。俺は街に出て、元の時代に戻る手がかりも探さなきゃいかん」

「……そうか。なら、スバルは一人でお留守番か」
「そうガッカリするな。昨日の礼に、お前の新しい服を買ってきてやる。スバルの身長はいくつぐらいだ？」
「知らん。生まれてこのかた計ったことがないから」
「じゃあ、ちょっとこっちに来い」
　流河はスバルをこちらへとやって来させ、スバルを自分の身体に密着させる。
「い、いきなり何を――」
「黙ってろ。動くと計れない」
「うぅ……」
　流河は自分の身体を使って、スバルの身長を計算してみる。それが終わると今度は腕をスバルの身体に回して、胸囲などを計っていく。
「胸は触るな。これでも女の子なんだ」
「無い胸を強調されても、欲情などせん。そういう趣味はないからな」
「これからどんどん大きくなっていくのだ」
「はいはい。終わったぞ」
　流河は溜め息をつきながら、スバルの身体を離すと、それじゃぁ行ってくると言って街へと出かけた。

「うーん、十五年という歴史の流れは意外に大きいものだな」
　すっかり様変わりした元坂上市へとやって来た流河は、自分が十五年前に落ちた橋に寄りかかって感慨に更けていた。
　一瞬、全然違う都市に来たかと思ったぐらいだから、市町村合併というのもなかなか侮れない。
「帰る手がかりっていっても、ここぐらいしか思いつかないよな……」
　流河は、橋の下を眺めてみる。しかし、そこには次元の穴のようなもの（どういう形のものかも知らない）があるわけでもなく、景色が揺らいで過去や未来の世界が見えたりすることも無かった。
　普通の景色。ただ、自分が居た世界よりも十五年後ということだけが違うのみ。
「本当なら飛び込んで実験してみたい所だが、スバルの服を買う前にずぶ濡れになるのもまずいし、電車にも乗れなくなるだろうな」
　しかたなく、流河は踵《くびす》を返して、街の中へと戻っていった。
　街へと戻った流河が苦戦したこと。それはスバルの服を調達するというミッション。
　よくよく考えたら、流河は、二十代前半の男。そんな男が、子供服売り場で熱心に下着から洋服まで選んでいるというのは、異様な光景だったに違いない。
　しかも子供服のことなどよくわからない流河は、果敢にも店員を呼んで色々と話を聞いて服を選んでいくという行動にまで出た。

　これもスバルのためだとぐっと恥ずかしい思いを堪えた。
「娘さん、喜ばれるでしょうね」
「ええまぁ、誕生日プレゼントですから。折角だし、綺麗に着飾ってやりたいんですよ」
「あらあら、幸せそうですね」
　とかまあ、店員からの質問に対しては、娘の誕生日プレゼントだと言ってお茶を濁した。
　正直、それで納得してしまう店員に対して、娘がいる歳の男に見えるのかよと心の中でつっこんでおいた。
　しかし、帰り際、店員もそれで納得してしまいたかったのかも知れないなと後になって思い返した流河であった。
　――ああ、これ以上考えるのは止めよう。
　流河は足早に、スバルの元へと帰って行った。

「ただいま、スバル」
「おかえり、流河」
　スバルの元へと帰ってきた流河は、早速買ってきたばかりの服をスバルに着せようとする。
「ほら、Ｔシャツを脱いでこれに着替えろ」
　流河がスバルのＴシャツに手をかけて脱がせようとすると、ぱっと後ろへ下がるスバル。
「なんだよ？　着替えさせられないだろ？」
「エッチ……」
「ぶっ、なにをませたことをいってるんだ」
「これでも女の子なの。着替えるところを男の人に見られたくない」
「はいはい、わかりましたよ。ほら、服を渡すからそっちの影で着替えてこい」
「うん、ちょっと待ってて」
　今度は流河の言うことを素直に聞いて、流河からは見えない場所で着替えを始める。
「買ってきたパンツもしっかり穿けよ。じゃないと股下が擦れて痛くなるぞ」
「ん～、窮屈」
「なんだ、サイズ小さかったか？」
「ちがう。下がごわごわして変な気分なの。――あっ、これって流河と同じジーパンってやつ？」
「そうそう。下着のパンツを穿いてからそのジーパンを穿いてるよな？」
「それぐらいはわかるよ。いくら何でもそこまで無知じゃない」
「まあさすがにジーパンの上にパンツを穿く奴は居ないか。いたら変態だ」
「よし、着替えたよ」
　スバルは草むらの影からひょいと姿を現し、流河に自分の新しい姿を見せてみる。
「なかなか似合ってるぞ」
　上は黄色を基調とした長袖の服を、下は黒のジーパンと少々女の子っぽくない格好にも思えるが、スバルは活動的な女の子みたいだから、こういった格好のほうが動きやすいだろうと思っ

て買ってみたのだが……。
「気に入ったか？」
「うん」
「ちなみにその服装のコンセプトはスバルの名前から考えてみた。黒い夜空に光るスバルをイメージしてそういう色を選んでみたんだ」
「スバルは光ってないよ？」
「星のスバルのことを言ってるんだ」
「スバルの星って黄色かったっけ？　違ったような気もするけど……」
　スバルはうーんと悩みながら考えだす。
「いいの。青白い星とか赤っぽい星もあるけど、星って言ったら黄色ってイメージもあるし。スバルにはその色が似合ってると思ったの」
「そっか。スバルのことを思って悶々として選んだんだね」
「悶々ってなんだよ！　もうちょっと言い方ってものがあるだろ？」
「あはは、ありがとう」
　――チュ
　スバルは流河の首に飛びつき、その頬に御礼のキスをした。
「うれしい？」
「ばっか。嬉しくないって」
「またまた～」
　スバルは流河の首を腕で掴んだまま、ぶらぶらと身体を揺さぶり始める。
「わーい。流河そのまま回転してみて！」
「ったくしょうがないな」
　流河はその場で身体をぐるぐると回転させてやる。
「メリーゴーランド～ぐるぐる～ぐるぐる～」
「結構重いな……スバル」
「女の子に体重のことを言わないのが男の子の礼儀だって教わったよ」
「みどじぃか」
「そうだよ」
　ぐるぐると回っているうちに身体も段々と熱くなってきたか、寒い冬にはそれが、逆に心地よい暖かさとなった。
　しばらくスバルと遊んでいると日も沈み始め、人々がまたこの河原に集まってきた。にぎやかな一時の始まりだ。

「ほう、それはよかったのう」
　みどじぃがスバルの服のことを尋ねてきたので、スバルが嬉しそうに事の顛末を話して、食事中のいまに至るというわけだ。

「しかし、儂が服をやろうといったときは拒んでいたのにどういう風の吹き回しじゃ？」
「それはみどじぃはスバルに勉強を教えてくれるし、こうやって食事もご馳走してくれるもん。これ以上何か貰ったら悪いと思って……」
「ふぉふぉふぉ、そんなこと気にせんでもええのに。本当にスバルは優しい子じゃ」
　みどじぃはスバルの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。流河はそれを頬笑ましそうに眺めていた。
「しかし……、昨日から思ってるが、この食材は何処から調達してきてるんだ？」
「これか？　これは全部自分たちで育てた野菜を使って料理しているのじゃ。だから肉は入っておらんじゃろ？」
「この野菜類を全部とはすごいな。でも、よくそんな土地を持ってたな」
「山の一部を、こっそりと耕して使わせてもらっとる。無論、許可など貰ってないがな」
「駄目じゃんかそれ！」
「生きるために、そんな堅いことを言っていたら生きていけんわ」
「じゃあそれ以外の調味料は？」
「皆、別段お金を持っておらんわけでもない。ちょこちょこっと街で働いている奴らも居る。そういう奴らは、調味料を調達してくる。それが無理な奴らは、畑を耕したり、食材を自然の中から探してくる役目とちゃんと決まり事があるのじゃ」
「ふーん、なるほどな。それぞれ訳ありだから、自分達の手伝える範囲で手伝っているとそういうことか」
「そういうことじゃ。皆、出来ることと出来ないことがある。自分にできんことを無理矢理人からやらされても、そうそう続くものじゃない。だが、社会の中に入れば、そういった仕事も多いのもまた事実。難しいものじゃな」
「そんな社会に適応できなかったからここにいるわけか」
「社会というのは適応できる人間には快適じゃが、適応できない人間には地獄に等しい。そこが行政もわかっておらんのだろう。無駄な制度ばかり作りおって……」
　みどじぃは、秋頃拾った柿の葉を乾燥させて作ったという、柿の葉のお茶を飲みながら、溜め息をつく。
「未来というのもなかなか厳しいものじゃろ？」
「そうだな。俺の居た時代よりもそういう部分はもっと厳しい社会になってるみたいだな」
「御前さんが過去へと帰ることが出来ならば、もうちょっとマシな社会になるように努力してみんか？」
「俺一人でか？　たった十五年先の世界を変えられるほどの力は俺にはないぜ」
「誰も変えようと思わなければ、世界というものは変わらん。しかし、革命というのもは、得てして一人の人格者によってなされる事が多い。――変えようと思えば、一人でも世界を変えることは難しくないという事じゃ」
「俺にそんなカリスマ性はないと思うぞ」
「そんなことはないぞ。スバルを手なずけることが出来ただけでも十分素質がある」
「こいつは人見知りなんぞしないだろ？」
「いやいや、スバルは人一倍、人の心を読むのが得意なのじゃ。だから自分のことをよく思わな

い人間には決してなつかないし、姿を見せることもないじゃろう。御前さんは選ばれたのじゃよ、スバルにな……」
「どうした？　流河、変な顔してるぞ？」
「お前は俺のこと好きか？」
「好きだぞ」
「ふぉふぉふぉ、よかったのう」
「やっぱり、みどじぃの思い違いだ。単に、子供になつかれたようにしか見えない」
「世界を変えるのは、若い子供達じゃて。儂のような老いぼれに好かれたところで、世界は変わらんわい。――よく肝に銘じておけ」
　みどじぃはまた茶をすすると、自分の使った食器を片付け始めた。

第３章　クリスマスイブ

　なんだかんだで、十五年後の世界に来て、もう二週間以上になる。その間、色々と帰るための方法を自分なりに探してみたが、結果は全て駄目だった。
　一応、十五年前に落ちた橋から下へ飛び込んでみたものの、水浸しになるだけで、いっこうに過去へ戻ることは出来なかった。あんまりやりすぎても、警察を呼ばれて面倒なことになるので、そう多くは実験することも出来なかったが……。
　そうこうしているうちに、今日のクリスマスイブの日を迎えた。
　街に出ると華やかな電飾で飾られており、何処を見てもカップルだらけという状態だ。
　スバルも連れてこようとしたが、何故かスバルはそれを拒否し、自分は留守番をしているといった。
　よく考えたら、スバルと出会ってから、スバルがあの河原から出た姿を見ていない。
　いったいどういうことだろうか？
　やはり、自分が気を許した相手以外の人間が多くいる場所には、怖くて近づけないということなのか？
　そうだとしたらなかなか厄介だなと流河は思った。
　しかし、流河のその考えは、スバルとの生活に慣れ始め、十五年後の世界に定住しようかと心の中で思い始めているということにほかならない。その事実に、流河自身はまだ気がついていなかった。
「さて、スバルにケーキでも買っていってやるか」
　流河は店先で売られているクリスマスケーキのひとつを買う。苺がたっぷりと載った生クリームケーキ。多少値段が高い気もしたが、それはクリスマス価格というやつだろう。
　ケーキを買った流河は、足早に街を離れ、ケーキが傾かないように注意を払いながら、スバルの元へと帰宅した。
「おーい、ただいま。スバル、いま帰ったぞ」
　夕暮れの人も疎らな河原に一人佇んでいるであろうスバルに対して、流河は大声を上げて呼びかける。
　しかし、スバルからの元気で無邪気な返答が帰ってくることはなく、河原はシーンと静まりかえっていた。
「居ないのか？　おーい」
　流河はまた声を上げる。今度は自分の声でスバルの声がかき消される事の無いよう、囁きかけるように。
　河原へと降り立った流河は、スバルの行方を隈無く探していく。だが、一向に見つかる気配がない。
「はぁ……はぁ……」
　流河の脇にある、丈の高い草が生い茂っているあたりから、微かにだが、人の息づかいらしき

ものが聞こえた気がした。
　流河は迷わずその草むらの中へと入っていき、全神経を耳へと集中させる。
「はぁ……はぁ……くぅっ……痛い……」
　やはり間違いなさそうだ。さっきよりもハッキリと人の苦しんでいる声だとわかる。
「スバルか？　そこに居るのはスバルなのか？」
「ぅ……りゅ……う……が……？」
「待ってろ！　今すぐそっちへ行ってやるから！」
　流河は草むらをかき分け、スバルの息づかいの聞こえる方へと一生懸命に進んでいく。時折、草むらをかき分けるとき、指や腕の一部が葉っぱによって切れている感覚があったが、いまはそんなことにいちいち構っている暇は無い。
「大丈夫か！」
　スバルを見つけた流河が、スバルの容体を気遣い声をかける。しかし、スバルの意識はすでに朦朧《もうろう》としており、流河の声に答えることが出来なくなっているようだ。
　顔はリンゴのように真っ赤に染まり、浅い呼吸を繰り返している。時折、胸を掻きむしるようにぎゅっと手を握り、もがき苦しむ。
　いったい何の病気だ？　風邪か？　肺炎か？　それとももっと別の何かか？
　医者としての知識が皆無である流河には、スバルが何の病気にかかってしまったのかなどわかるはずもなかった。
　とりあえず、開けた場所にスバルを寝かせ、上から流河の服を掛けて、寒くないようにする。そして、ハンカチを濡らしてきて、スバルの額に当ててやった。
「こんなときに、みどじぃは何をやってるんだ……」
　肝心なときに居ないみどじぃに腹を立てる流河。しかし、みどじぃが来たとしても問題が解決するわけではない。
　ただ、流河は思ったのだ。あの人はきっとスバルを救える手立てを知っている――そんな気がしたのだ。
「やはり、こうなってしまったか……」
　みどじぃの帰りを待つ流河の後ろで、静かに何かを悟るような、諦めにも取れるような声が降りかかってくる。
　流河ははっとして、振り返り、上を見上げると、そこには悲しそうな目をしたみどじぃが立っていた。
「こんな時に何処に行っていたんだよ！　スバルの容体が悪いんだ。早く病院か何かに連れて行かないと手遅れになるかも知れない」
「……それは無理じゃとわかっておるだろう。スバルは捨て子じゃ。健康保険に入ってもいなければ、戸籍に登録されているわけでもない。病院に連れて行きたくても連れていけんのじゃ」
「じゃあ、どうしろっていうんだよ」
「そのまま待つしかない。スバルが死んでしまうのをな」
「なっ！　ふざけたことをいうなよ！　死ぬまでまてってそんなことを出来るわけないだろ。……俺が病院へ連れて行く」

「……無理じゃ」
　みどじぃの言葉にむっとした流河は、スバルを抱きかかえると、河原を抜け出し、タクシーが拾える所までスバルを連れて行こうとする。
　しかし、河原を抜け出そうとした瞬間、ゴンっと鈍い衝撃が身体を突き抜け、流河は思わず尻餅をついてしまう。
「……なんだいまの？」
　流河はいま身体に受けた衝撃を疑問に思いながらも、もう一度外へと出ようとする。
　しかし、再びゴンっという鈍い衝撃を全身に受けることとなる。
「だから無理じゃといったであろう。スバルはここから抜け出すことが出来ん。スバルの記憶とこの空間とが固定されて繋がっているのじゃ。一生ここから抜け出すことは不可能じゃ」
「なんだよそれ。意味が全然わからねぇ」
「――スバルはもうすでに死んでいる。五年前にな」
「なっ！　じゃあ、ここにいるスバルは何なんだよ。偽物だとでも言うのか？」
「それも本物のスバルじゃ。死ぬ一年前のスバルの身体と記憶を持った存在といったらいいかのう」
「ああもう、ますます理解できなくなってきた」
「まあ慌てなさんな。ちゃんと順を追って説明してやろう」
「そんな悠長なこといってられないんだよ。そうしている間にもスバルが……」
「スバルを本当に助けたいと思うなら、儂の話を聞け」
　みどじぃは重々しい顔を流河に向けると、静かに事のはじまりを話し始めた。
「スバルがこうなった原因を話すには、まず儂の話からせねばならない。信じられぬかも知れぬが、儂はこの世界よりももっと先の未来から来た人間じゃ」
「はぁ？　こんな時に冗談はよしてくれ」
「冗談などではない。その証拠といっては何だが、御前さんをこちら側の未来へと連れてきたのは儂じゃ」
　みどじぃは、驚いたか？　といった風に流河に話しかけてくる。
「儂は、未来からこの時代に、自分の余生を楽しもうとやって来た。あまり人と干渉しすぎるのもアレだと思い、ホームレスとして振る舞うことにした。そんな冬のある日、この場所で捨てられていたスバルを見つけた。最初は見なかったことにしようを考えたのじゃが、儂もかつては教師をしていた身分。そう簡単に子供の命を見捨てることができんかった。儂はスバルを育てる決心をし、スバルの成長を見守った」
「それがどうして……」
　流河は未だに息苦しそうに悶え苦しむスバルを横目に、みどじぃの話の続きを促す。
「丁度、五年前のクリスマスイブの事じゃ。あの日はこの辺り一帯が大雪の天候になったんじゃ。儂もスバルを一人でここにおいて居ったことが気がかりで、急いで帰ろうとした。しかし、吹雪のために視界は悪く、路面も雪が積もり、思うように前に進むことが出来んかった。そうしてようやく、スバルの元へと帰り着くと、スバルは雪の上で悶え苦しむようにして白い息を吐い

ておった」
「じゃあ、いまのこの状態も五年前のそれと同じ状態って事か？」
「そうじゃ。スバルはその時、肺炎に冒されておった。儂はスバルを病院へと連れて行きたかったが、吹雪のためにそれも難しかった。だが、ここで出来ることなどたかが知れておる。スバルの容体はどんどん悪化し、そしてクリスマスを迎えた午前０時。――スバルはその命を引き取った」
「……大体の事情は飲み込めた。けど、死んだはずのスバルがこうしてここにいて、そしていまも苦しんでいる理由がなんだ？」
「儂がスバルを助けようとしたのが原因じゃ。スバルが亡くなった後、儂は時間を遡ってスバルを助けば良いことに気がついた。儂は急いで１日前に遡ろうとした。……しかし、ここで思いも寄らぬ事が起こった。亡くなったばかりのスバルの身体が、装置の中へと落ちてしまったのじゃ。死んだ人間が装置の中へと落ちた場合にどうなるのか、儂には想像もつかなかった。そして、装置が淡い光を放ち、転送が完了したことを告げると、スバルは儂の後ろに立って居った。しかし、それは一年前の記憶と身体を持ったスバルじゃった」
「一日逆行させるつもりが、死んだ人間には一年逆行される結果になったということか。でも、それなら何の問題もないはずだろ？　ちょっと記憶を一年分失っているだけで、何の問題もないはずじゃ？」
「大ありじゃ。そもそもおかしいじゃろう。死んだ人間が転送された場合、本来なら、その人間は転送された先でも死んでいることになる。だが、スバルは生きたままこの時代に戻ってきた。それに、装置は一方通行なのじゃ。こちらから過去へ行けば、過去でもう一度装置を起動させて、こちら側へと戻ってこない限り、戻れないようになっておる」
「なら、過去のみどじぃが装置を起動させて、こちら側に戻したってことじゃないか？」
「最初はそうも考えた。しかし、結果は違った。装置を起動できる回数が変わっておらんかった。つまり、過去の儂がスバルを返すために装置を使ったのならば、それが未来の儂にも影響を及ぼしておらんとおかしいのじゃ」
「なるほどな。だったら、このスバルはいつの時代のスバルって事になるんだ？　それこそ、お化けみたいになちゃうじゃないか」
「お化けというのはなかなか的を射ている。どうやら、装置の影響で、スバルだけではなく、スバルを含むこの河原の空間が無限ループを繰り返しているのじゃ。この河原の空間がスバルが死ぬ一年前からスバルが死ぬまでの間をぐるぐると行き来しておるのじゃ。言ってみれば、スバルはここの自縛霊となってしまったようなものじゃ」
「……その理論で言ったら、空間とスバル自身が無限ループしているだけであって、スバルが死ぬという事象はループすることはないんじゃないのか？」
「その原因は、儂にもわからん。スバルが死ぬという現象もひとつのループ条件に入っているようなのじゃ。この五年間観察してきたが、一向に変わる気配がなかった」
「スバルのことはわかった。じゃあ、俺をこの時代に連れてきたこととスバルを助けることに何の繋がりがある？　ループしたままなら、俺が来たところでなにもかわらないだろう？」
「いや、御前さんが来ることで、ループ現象が止まればと最初は考えておったのだ。この時代の

人間ではないものがここへ来たならば、何か変わるのではないかと思ってな。だが、それも失敗に終わった」
「じゃあ、またスバルは苦しみながら死んで、またここに生き返る……それを繰り返すだけだっていうのか！」
　流河は、落胆した表情を見せたみどじぃの胸倉を掴んで、罵声を浴びせる。こうなった原因を作ったのは、みどじぃ自身だ。それをそんな風に諦めた顔を見せるなんて――。
「御前さんは、スバルをまだ助けたいか？　御前さんの人生全てをなげうってまで……」
「ばかやろう！　もうスバルと俺とは繋がりを持ってしまったんだ。その繋がりをやすやすと簡単に手放すような薄情な人間に成り下がるつもりはない。スバルを助けることが出来るんなら、俺の人生を、命を投げ出してやっても良い！」
「――そうか。ならば、これを持って御前さんが落ちたあの橋へと戻れ」
　みどじぃは流河に液体の入った小さな小瓶を渡す。
「これ何の薬品だ？」
「それが時間跳躍するための装置じゃ。それを水に垂らすと、水面に波紋が広がる。その波紋が、時間の波へと干渉して、時間を飛び越えるためのゲートを創り出す。行きたい時間を頭の中に思い浮かべれば、その時代へと行くことが出来るのじゃ」
「わかった。それでスバルを助けるにはどの時代に行けば良いんだ？」
「簡単な事じゃ。御前さんの居た時代に戻るだけのこと。そうすれば、まだスバルはこの世に生を受けていないことになる。そしてスバルがこの河原へと捨てられるその日に、御前さんがスバルを拾い上げ、そして育ててくれれば……このループ現象も止まるかも知れん」
「だったら、みどじぃも一緒に俺にいる時代に来ても良いんじゃないのか？　そっちのほうがスバルだって喜ぶはず」
「駄目じゃ。儂にはこの世界のスバルを見守る役目がある。こうなってしまったのも、全て儂の責任じゃ。せめてもの罪滅ぼしをさせて欲しい」
「……そうか」
「御前さんがスバルを育ててくれれば、こんな不自由な生活を送ることもなかろう。そして未来が変われば、この世界の存在も不安定になっていく。やがては消え去るじゃろう。そうなれば、全てが終わる」
「ちょっと待ってくれよ。世界が消えるって……それじゃあ、みどじぃはどうなる？　消えてしまうのか？」
「じゃろうな。元々、未来から来た人間じゃ。消えたところで何の問題もない。むしろ心配なのは、ここに集まってきている人間達の事じゃ。スバルがここで成長しなかったという世界が出来たなら、奴らがどういう道を歩むのかその点だけが気がかりじゃのう」
「大丈夫だと思うぞ。スバルが居なかったとしても、あいつらは立派に生きていると思う。なんなら、たまにスバルをここに連れてきてやるさ」
「そうか。ならそうしてくれると助かるのう」
　流河は隣で未だに苦しそうにもがいているスバルを横目で見ながら、「じゃあ、行ってるくな

」と一言だけ声を掛けた。
「最後にひとつだけ……聞いても良いか？」
「なんじゃ？」
「何で俺を選んだんだ？　他の奴だって居ただろうに――」
「ふぉふぉ。そんなことか。御前さんが入っていたＳＮＳサイトのコミュニティのＯＦＦ会を企画したのは儂じゃ。つまり、あのＯＦＦ会の中で儂はこっそり選定をおこなっていたという事じゃな。スバルの事を本気で愛してくれる者のことを……」
「選んでいた？　俺はみどじぃを見かけた記憶はなかったんだけど……？」
「未来人を舐めて貰っては困るのう。変装などたやすい事じゃ」
「そっか。なら、もし俺がスバルの件について了承しなかったらどうした？」
「記憶を消して、元の世界に返しただけじゃよ。無理強いなどしない」
「それだけ聞ければ、十分だよ。――みどじぃ、約束するぜ。必ずスバルを助けてみせるってな」
　そして流河は走り出す。
　スバルを助けるため、自分の元居た時代へと帰るために――。

　流河は無事に元の時代へと帰り着き、そして平穏な学生生活へとその身を投じていった。
　無事に大学も卒業し、就職先にもありつくことが出来た。
　初任給はそれほど高くはなかったが、仕事に関しては時間的融通の利く職業であったため、スバルを育てることになっても困ることはないだろう。
　それに育児休養ってやつもしっかりしている。
　まあ、最初からそういう会社ばかりを選んで、就職活動をしていた部分はあったのだが……。
　これでスバルを迎え入れる準備は万全に整ったと流河は思っていた。
　――そして世の中はクリスマスムード満点の時期。
　流河は会社の上司に、今日はデートの約束がありますからといって、早めに仕事を切り上げさせて貰った。
　みどじぃにスバルを拾った日を聞くと、それはクリスマスのを祝う鐘が鳴り響いていた午前０時。ちょうどクリスマスになったときだったと聞いた。
　サンタクロースが子供をプレゼントに持ってきたのかと思ったという表現はちょっと可笑しかったが、あながちそれも間違ってはいないかもしれない。
　流河にとって、これから再び出会うであろうスバルは、たしかにサンタクロースからの贈り物のように思えたからだ。
　奇しくも、スバルが亡くなったその日も、クリスマスを迎えた瞬間だったというのは、みどじぃにとっては耐え難い苦痛だったのかも知れない。
　喜びと悲しみが交差するクリスマスの時。
　流河はどうしてもその未来を変えてやりたかった。
　この世界にはみどじぃは存在しない。
　だから、みどじぃがスバルを拾わないのあれば、スバルはそのまま寒さの中で凍え死んでしまうことになる。
　流河はこの日をずっと待った。
　あの楽しい日々を過ごした河原へと戻ってきた流河は、スバルが捨てられるその時を待っていた。
　スバルが捨てられた瞬間、スバルの親を捕まえて、説得することも考えたのだが、そんなことをしても何の解決にもならないだろうと考え直した。
　そんなことはすでにみどじぃがやっているのだろう。
　事情はどうあれ、スバルを捨てたということは、スバルを育てられるような環境ではないということだ。
　ここで止めても、また何処かでスバルが捨てられてしまう危険性がある。
　それならば、自分が責任を持って、みどじぃとの約束を果たし、スバルを育て上げる方が良いだろう。

――やかて空から粉雪が舞い降りてくる。
しんしんと降り積もる雪は、流河の体温を少しずつ奪い始め、白い吐息を吐かせる。
流河はふと空を見上げる。
すると、雪が降り積もっているにもかかわらず、空は晴れ渡っているという不思議な現象を見ることとなる。
星空が見えたのだ。
その時、すっと一筋の流れ星が流れる。
流河は願った。どうか、スバルが幸せになれますように――。
ゴーン、ゴーン。
教会の鐘の音色と共に、小さいがそれでも目一杯の声を張り上げ、生命の主張をする赤ん坊の声が聞こえる。
――スバル！
流河は河原へと駆けていった。声のするほうへと声のするほうへと……。
そして見つける。
籠の中で毛布に包まれて泣いているスバルの姿を――。

「……また会えたね、スバル」

スバルの小さな手が、流河の小指をぎゅっと掴んだ。

ＥＮＤ

星が流れ落ちる場所

http://p.booklog.jp/book/32249

著者：綾瀬 トモ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ayasetomo/profile
twitter：http://twitter.com/ayasetomo

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/32249

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/32249

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.